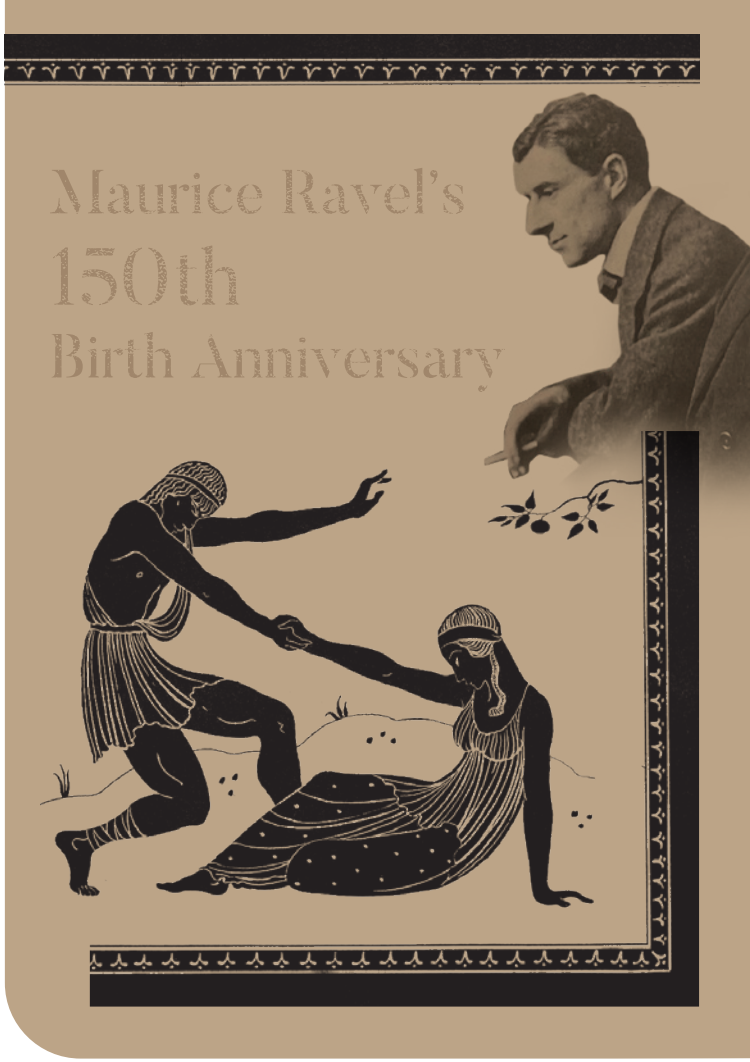
主な出展リスト

- ◆ バレエ・リュス公式プログラム／フランス：パリ・オペラ座／1910年〈PRBROF-001〉
- ◆ バレエ・リュス公式プログラム／フランス：シャトレ座／1912年〈PRBROF-003〉
- ◆ 雑誌／『コメディア・イリュストレ』vol.3 no.17／フランス／1911年6月1日〈MG-1027〉
- ◆ 雑誌／『コメディア・イリュストレ』vol.4 no.18／フランス／1912年6月15日〈MG-1229〉
- ◆ 限定書籍／『タマラ・カルサヴィナ』／画：ジョルジュ・バルビエ／フランス／1914年〈AB-04〉
- ◆ 限定書籍／『タマラ・カルサヴィナ』／イギリス／1922年〈AB-13〉
- ◆ 写真／『ダフニス』を演じるミハイル・フォーキン／1914年〈PH-D-084-01〉
- ◆ 書籍／『ニジンスキー』／著：リチャード・バックル／イギリス／1971年〈BK-0004-bio〉
- ◆ 書籍／『バレエ・リュスとその世界』／編：リン・ガラフォラ＆ナンシー・ヴァン・ノーマン・ベーア／アメリカ／1999年〈BK-0226-br〉
- ◆ カタログ／『魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展』／監修：薄井憲二、ロバート・ベル／国立新美術館・TBSテレビ／2014年〈BK-2988-bd〉

主な参考文献

- ◆ ロンゴス（松平千秋訳）／『ダフニスとクロエー』／岩波書店／1987年
- ◆ セルゲイ・グリゴリエフ（薄井憲二監訳）／『ディアギレフ・バレエ年代記1909-1929』／平凡社／2014年
- ◆ セゾン美術館・一條彰子（編）／『ディアギレフのバレエ・リュス展1909-1929：舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち』／セゾン美術館／1998年
- ◆ 海野弘（解説・監修）／『華麗なる「バレエ・リュス」と舞台芸術の世界：ロシア・バレエとモダン・アート』／パイインターナショナル／2020年
- ◆ 小倉重夫／『ディアギレフ：ロシア・バレエ団の足跡』／音楽之友社／1978年
- ◆ 芳賀直子／『バレエ・リュス：その魅力のすべて』／国書刊行会／2009年
- ◆ Serge Diaghilev: Ballets Russes（CD）Warner Classics／2022



Kenji Usui Ballet Collection

Maurice Ravel's 150th Birth Anniversary

～ " Daphnis et Chloé " ～

2025/1/21（Tue.）～2025/3/9（Sun.）

（休館日はwebでご確認ください）

◎ 企画・監修

関 典子（せき・のりこ／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター）

Noriko Seki（Curator of Kenji Usui Ballet Collection）

舞踊家・振付家・舞踊研究家。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞・お茶の水女子大学賞小泉郁子賞など受賞。

アシスタント：若林絵美（Emi Wakabayashi）後藤俊星（Shunsei Goto）

兵庫県立芸術文化センター　薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel：0798-68-0223（代表）fax：0798-68-0212

禁転載・複製・引用

Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション

2025企画展

モーリス・ラヴェル 生誕150周年

～『ダフニスとクロエ』を中心に～

2025/1/21（Tue.）～2025/3/9（Sun.）

2025年は、作曲家モーリス・ラヴェル（1875-1937）の生誕150周年にあたります。彼の独創的な管弦楽法、官能的なメロディ、韻律の柔軟性は、振付家の挑戦意欲を掻き立て、数々の名作バレエを生み出しました。映画『ボレロ』（アンヌ・フォンテーヌ監督／フランス／2024）の公開が記憶に新しいところですが、本展では『ダフニスとクロエ』に焦点を当て、人々の協働によって紡がれたバレエの世界をご覧いただきましょう。

バレエ『ダフニスとクロエ』（1912）は、全1幕3場の舞踊交響曲です。一時間を超える大作であり、当時30分ほどの短い作品を上演して好評を得ていたバレエ・リュスとしては、異例の長さでした。そして、この作品の制作には、実に8年もの長い時間を要したのです。『ダフニスとクロエ』というバレエ作品の数奇な経緯について、貴重な資料と共に、ご紹介いたします。

Hyogo Performing Arts Center

モーリス・ラヴェル
(Maurice Ravel 1875.3.7-1937.12.28)

フランスの作曲家。父はスイス、母はバスク地方の出身。バレエ・リュスとのゆかりも深く、セルゲイ・ディアギレフ主催パリ・オペラ座でのロシア音楽祭(1907)やバレエ・リュス初のパリ公演(1909)に観客として立ち会っている。イーゴリ・ストラヴィンスキー『春の祭典』(1913)を最初に認めた一人であり親交を深めた。

ラヴェル作曲のバレエ音楽

『マ・メール・ロワ』ピアノ連弾版(1910)、管弦楽版:バレエ(1912)
『高雅で感傷的なワルツ』ピアノ独奏版(1911)、管弦楽版:バレエ(1912)
『ダフニスとクロエ』バレエ(1912)
『ラ・ヴァルス』2台ピアノ版・管弦楽版(1920)、バレエ(1929)
『子供と魔法』オペラ(1925)
『ジャンヌの扇』バレエ(1928)*10人の作曲家が短編を作曲
『ボレロ』バレエ(1928)

『ダフニスとクロエ』の楽譜を見ながらピアノで演奏するニジンスキーとラヴェル/1912年

ラヴェル、ニジンスキー、ニジンスカ(パリのラヴェル宅のバルコニーにて)/撮影:ストラヴィンスキー/1914年

『ダフニスとクロエ』(Daphnis et Chloé)

[振付・台本] ミハイル・フォーキン(ロンゴスの田園叙事詩に基づく)
[音楽] モーリス・ラヴェル
[美術・衣裳] レオン・バクスト
[初演] 1912年6月8日、パリ:シャトレ座
[出演] ワツラフ・ニジンスキー、
タマラ・カルサヴィナ、
アドルフ・ボルム 他

舞台は地中海の島。羊飼いのダフニスと恋人のクロエが、牧神とニンフたちを賛美するために、他の若者たちと洞窟の神殿に集まっている。もう一人の羊飼いダルコンと誘惑する女リシニオンは恋人たちを別れさせようと画策するが、失敗に終わる。突然、ブリュアクシス率いる海賊のならず者たちが登場し、クロエを連れ去ってしまう。動揺したダフニスが牧神に助けを求めると、牧神は海賊たちを驚かせて追い払い、二人の再会を叶えるのであった。再会を喜ぶダフニスとクロエは牧神に感謝し、お祝いのダンスを踊る。

上『ダフニスとクロエ』を演じるニジンスキーとカルサヴィナ/画:ジョルジュ・バルビエ/1914年
左下「クロエ」を演じるカルサヴィナ/1912年
右下「ダフニス」を演じるフォーキン/1914年

「海賊たち」/衣裳:レオン・バクスト/1912年

『ダフニスとクロエ』の数奇な経緯

『ダフニスとクロエ』挿絵本/著:ロンゴス/画:マルク・シャガール/パリ:テリアード出版/1961年

1904年、2世紀のギリシャの文筆家ロンゴスによる田園叙事詩『ダフニスとクロエ』を読んだ振付家ミハイル・フォーキンは、同名のバレエを構想し始める。彼はロシア帝室劇場での上演のために初めてバレエ台本を書き、「バレエ改革のための意見書」を添えて、支配人ウラジーミル・テリャコフスキーに提出した。だが、劇場側からの反応は乏しく、『ダフニスとクロエ』の台本も忘れ去られてしまった。

1909年、フォーキンの台本と意見書を読んだバレエ・リュスの団長セルゲイ・ディアギレフが、このバレエの実現を決める。音楽家モーリス・ラヴェルに作曲を依頼し、これがバレエ・リュスのために書き下ろされた初めてのフランス音楽となった。1907年にギリシャを調査旅行した美術家レオン・バクストの興味もそそり、彼が舞台美術と衣裳を担当することとなった。

当初1910年に初演する予定であったが作曲は難航し、期日までに完成しなかったどころか翌1911年のシーズンにも間に合わなかった。これを受けてバクストは、同じくギリシャをテーマとした『ナルシス』(1911)の制作をディアギレフに持ち掛けるが、このことがフォーキンを怒らせた。さらにこの間、他のフォーキン振付作品が次々と上演され(1910年『カルナヴァル』『シェエラザード』『火の鳥』、1911年『薔薇の精』『ナルシス』『サトコ』『ペトルーシュカ』、1912年『青い神』『タマール』)、ディアギレフは、当初の熱意を失っていった。一方のフォーキンは作品をあたため続け、二人の間には作品に対する大きな温度差が生じていた。

1912年5月5日、ついに『ダフニスとクロエ』の音楽が完成する。しかし、肝心のディアギレフは上演に乗り気ではなくなっていた。その理由は、この曲がバレエの形式ではあるものの振付家との十分な協調なしに作曲されていること、曲の基調がリズムよりもメロディに置かれていること、さらに、ディアギレフはこの頃、フォーキンよりもワツラフ・ニジンスキーの振付を評価し、『牧神の午後』に注力していたことなどが挙げられる。

1912年春、ディアギレフはラヴェルの楽譜出版を請け負っていたジャック・デュランに『ダフニスとクロエ』の制作中止を申し出ている(この時はデュランが説き伏せ、制作はどうにか続行することになった)。また、ディアギレフはフォーキンにリハーサルの時間をほとんど与えなかった。ニジンスキー振付『牧神の午後』(1912年5月29日初演)を優先させたのである。

その結果、『ダフニスとクロエ』の初演は6月5日から8日に延期せざるを得なかった。さらに、フォーキン自身の談によれば、ディアギレフは『ダフニスとクロエ』をその日のプログラムの最初に持ってきた上、上演時間を30分早めるように指示したという。それでは批評家も観客も、この作品を見逃すに違いなかった(だが、この話については真偽のほどが疑わしいとされる)。ともあれバレエは完成した。

1912年6月8日、『ダフニスとクロエ』の初演は満席だった。そして、大方の批評家からは好評を得た。ロベール・ブリュッセルは「ル・フィガロ」紙に「この作品でフォーキンは再び、その並外れた才能を証明した」と書いている。ただし、ディアギレフにとっては、十分な証明にはならなかったようだ。彼はフォーキンを自分のもとに留めておこうとはしなかった。一方、冷遇を受けたフォーキンも、留まるつもりは全くなかった。幕が降りると同時に、彼はバレエ団を去っていったのである(1914年のロンドンでの再演では、ディアギレフとよりを戻して一時的にバレエ・リュスに戻ったフォーキンが、ダフニス役を踊っている)。

バレエ・リュスの活動期全般において舞台監督を務めたグリゴリエフは1923年、1914年以来の再演となったモンテカルロ公演を振り返り、次のように述べている。

――「舞台監督としての長い経験から、私は運のいいバレエと運の悪いバレエがあるという結論を出していた。そして『ダフニスとクロエ』は運が悪いほうだった。どういうわけかレパートリーに定着することができず、たいへんな苦労の末に復元された今回もまた、たった二回か三回の上演の後、レパートリーからはずされた。音楽も装置、衣装、振付も美しかったのに、何らかの悪意に彩られた運命が影響を及ぼしていたのだろう。」――
(セルゲイ・グリゴリエフ著、薄井憲二監訳、『ディアギレフ・バレエ年代記:1909-1929』、平凡社、2014年:原著1953年、213頁)

このように、バレエ・リュス版『ダフニスとクロエ』は数奇な作品であったが、ラヴェルの音楽は数々の振付家を刺激し、フレデリック・アシュトン(美術:ジョン・クラクストン/ロンドン/1951)、セルジュ・リファール(美術:マルク・シャガール/パリ/1958)、ジョン・クランコ(美術:ニコラス・ジョージアディス/シュトゥットガルト/1962)などの版を生み出している。